平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな）	金沢大学附属高等学校（かなざわだいがくふぞくこうとうがっこう）

校 長 名：加納　幹雄

所 在 地：石川県金沢市平和町1－1－15

電話番号： 076-226-2154

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	総合的な学習の時間

≪研究主題≫

新学習指導要領における「総合的な学習の時間」の目標を具体化するための指導内容と指導方法改善に関する研究

【研究の要点】

【研究成果のポイント】

①主体的かつ協同的に問題探究するための内容と指導方法の検討。ブレーンストーミング，ディベート，プランニング対決と段階的に学習方法をステップアップさせることにより，論理性，創造性，問題解決能力，協同性，表現力など諸能力をスパイラル的に伸長することができた。

②表現力を向上させる指導方法の工夫。ポスター発表，プレゼンテーションソフトを使用したプレゼンテーションを行わせることにより，より分かりやすい発表方法を工夫し，プレゼンテーション技能を習得した。

③生徒が成長するための評価方法の改善。観点別評価の方法を工夫することにより到達目標を明確にでき，自己評価，相互評価により改善点を自覚させることができた。

④宿泊行事を伴う「総合的な学習の時間」を探究型にする取り組み。グループ編成方法の改善や，研究テーマ決定への工夫，現地調査事項の明確化によって，協同性を発揮させ，探究型への方法を明確にすることができた。

⑤「総合的な学習の時間」の教育課程の中での位置付けの明確化。先進校との交流，校内カリキュラムマネジメント研修などを通して，教員の「総合的な学習の時間」の重要性の認識を深め，学校の教育諸活動との関連を明確にすることができた。他教科の授業方法にも影響を与えた。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，金沢大学人間社会学域学校教育学類の附属学校として，「教育基本法」・「学校教育法」に基づき，高等普通教育を行うとともに，高校教育の理論的・実証的研究，教育実習などを行う学校である。1学年120名余の小規模校で，その半数強の生徒が附属中学校出身者，半数弱が石川県一般中学校出身者で，県外中学校出身者は若干数。学習意欲は高く，ほぼ全員が4年制大学進学を希望している。平成4年度から3年間，文部省「教育研究開発学校」の指定を受け，「新教科『国際・文化科』の導入を考慮した教育課程の検討」を主題として，「総合的な学習の時間」導入に寄与する実践研究を行った。研究指定終了後も「国際・文化科」を継続し，平成14年度以降は「生活と社会」・「沖縄現地学習」を内容として「総合的な学習の時間」を実践してきた。「総合的な学習の時間」の一層の充実による，生徒の幅広い知的能力の伸長，創造性や表現力の向上，視野の拡大を課題としている。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	3	125	3	123	3	126	9	374
計		3	125	3	123	3	126	9	374

教員数　　24名（　　８名）

総合的な学習の時間は，1年生において「生活と社会」を2単位，1年生後半から2年生前半に「台湾現地学習」1単位を開設している。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

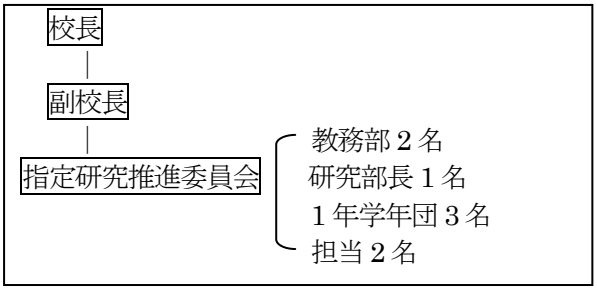
(1) 研究主題

新学習指導要領における「総合的な学習の時間」の目標を具体化するための指導内容と指導方法改善に関する研究

(2) 研究主題設定の理由

新学習指導要領では，(ⅰ)横断的・総合的・探究的な学習により，(ⅱ)問題解決能力の育成(ⅲ)学び方や考え方の育成，(ⅳ)主体的，創造的，協同的に取り組む態度の育成，(ⅴ)生き方を考えること，が目標とされた。これらの目標を実現できるよう，「生活と社会」の学習内容・学習方法・評価方法を改善すること，「台湾現地学習」をより探究的にするための学習内容・方法を改善すること，先進校の取り組みを参考にして，「総合的な学習の時間」の３年間の教育課程全体での位置付けを明確にすることを狙いとした。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	1学期・「生活と社会」（ブレーンストーミング，ディベート）内容と方法の実践研究 ・「生活と社会」観点別評価の研究 2学期・「生活と社会」（プランニング対決）内容と方法の実践研究 ・「台湾現地学習」内容と方法の研究 ・中間報告会実施 3学期・「台湾現地学習」事前指導・事中指導の実践研究
平成22年度	1学期・「台湾現地学習」事後指導の実践研究と評価方法の研究 ・「生活と社会」観点別文章評価の研究 1～2学期・「総合的な学習の時間」先進校との交流 ・「総合的な学習の時間」の教育活動全体での位置付けの検討 2学期・第22回高校教育研究協議会で公開授業，発表協議実施 ・「台湾現地学習」全体内容と方法の改善 3学期・「台湾現地学習」事前学習の方法改善

(5)「総合的な学習の時間」の全体カリキュラム

	方法	内容	メソッド	目標
生活と社会	ブレストディベート	身近な問題	ポスター，口頭	根拠をもって主張
	プランニング対決	未来と社会	プレゼンテーション	根拠をもって主張創造
台湾現地学習	事前研究	異文化	レポート，口頭発表	認識・仮説
	現地学習	異文化	体験・聞き取り	認識の拡大
	事後研究	異文化と自己	プレゼンテーション，レポート	認識の内在化

「生活と社会」は1年1学期から2学期

「台湾現地学習」は1年2学期から2年1学期

2　研究内容及び具体的な研究活動

1「生活と社会」の内容と指導方法の検討

(1) 研究の重点

主体的かつ協同的に問題探究させる内容と指導方法を検討する。

(2) 具体的な取組

① KJ法によるブレーンストーミングの学習方法を用いた。

② プロジェクタによる時間管理

③「身近な諸問題」についての理解を深めるため，ディベートの学習方法を用いた。

④ ２グループが「未来を創造する同一テーマについてプランを提案し合う」というプランニング対決を行った。プランは単にプレゼンテーションするだけでなく，相互に質

問・批判させ，それに対して回答するという形式を採った。

KJ法によるブレーンストーミング

H22 年度「生活と社会」年間実施表

1学期　活動概要		
第1回	オリエンテーション	犯人は誰だⅠ
第2回	犯人は誰だⅡ	
第3回	ブレーンストーミング 「男と女，どちらが得か」	
第4回	ブレーンストーミング 「都会と田舎，どちらが住みやすいか」	
第5回	ディベート「身の回りの事象」 論題決定・グループ決定・調査	
第6回	ディベート準備	
第7回 ～9回	ディベートⅠ ～ディベートⅥ	
第10回	1学期を振り返って	
2学期　活動概要		
第1回	「プランニング対決」オリエンテーション	
第2回	テーマの決定，グループの決定	
第3回	調査方法の検討	
第4回	校内における調査	
第5回	校内における調査	
第6回	プレゼンテーションの作成	
第7回 ～12回	第1回コンペティション ～第6回コンペティション	
第13回	各クラス最優秀賞学年発表会	

1学期は2時間連続，2学期は3時間連続で行う。

平成22年度ディベートテーマ例

- クレヨンしんちゃんは子供に見せるべきか
- 子ども手当の是非
- 高速道路無料化の是非
- ゴールデンウィークを地域でずらすことの是非
- 救急車の有料化の是非
- 英語の授業は小学校から必要か

平成22年度プランニング対決テーマ

- 学生が求めるラーメンをプランする
- 理想の男子高校生をプロデュースする
- 売れるＪ－ＰＯＰを創る－オリコンチャート１位を取ろう－
- 理想の死に方
- 完全犯罪を防ぐ方法
- 理想の新首都
- ＴＨＥ高校デビュー
- 理想の犬
- 展開の読めないアニメを作る
- 泣けるプロモーションビデオつくり
- 能登をプロデュース
- 日本一売れるスナック菓子を作る
- 万博の日本館をプロデュース
- 学校を舞台に最強の人生ゲームを作成する

(3)考察及び成果と課題

① KJ法を採ることにより，積極的に多くの意見を出させることができた。

② プロジェクタによる時間表示をすることにより，時間がいつも意識され，集中したブレストができた。

③ ディベート，プランニング対決の方法を採ることにより，健全な競争心を生み出し，学習意欲を高め，発表内容を創造的にさせ，発表に対する工夫を生み出させることができた。

④ 学習方法を段階的にステップアップさせる中で，スパイラル的に論理的思考力が成長し，協同性が養われた。

2　表現能力を向上させる指導方法の工夫

(1)研究の重点

口頭表現のみならず，ビジュアルな表現能力を向上させる指導方法を工夫する

(2)具体的な取組

① ブレーンストーミングの結果をポスターを使って発表させた。

② プランニング対決はプレゼンテーションソフトを用いてプレゼンテーションさせた。

③　プレゼンテーションソフトの技能は教科「情報」で習得させ，先輩のプレゼンテーションを参考にさせた。

ブレーンストーミングの結果のポスター作成

プラニング対決プレゼンテーション

(3)考察及び成果と課題

①　表現方法を段階的にステップアップさせる中で，より分かりやすい表現方法を工夫するようになった。

②　プレゼンテーションは，単に文字・画像を表示するだけでなく，アニメーションを効果的に使ったり，他のコンテンツにリンクを張るなど，高水準の表現力を身に付けた。

3　生徒が成長するための評価方法改善

(1)研究の重点

生徒をより成長させるための口頭・文章による観点別評価方法を工夫する。自己評価，相互評価の工夫をする。

(2)具体的な取組

①　観点を明確にした教員用評価表を作成し，授業終了時に口頭で，次回授業において文章でフィードバックした。

②　観点を明確にした生徒用評価用紙を作成し，授業ごとに自己評価・相互評価させた。

ブレーンストーミング目標と評価の観点

目標	評価の観点
自分たちの経験や知識をもとにいろんな意見を出すことができたか。	・多様な意見をたくさん出せたか。
自分たちの意見を論理的にまとめて主張を明確にできたか。	・的確にグルーピングできたか。 ・自分たちの主張を根拠をもって主張できたか。
班員で協力しあって意見をまとめることができたか。	・一人一人が積極的に意見が言えたか。
ポスターを使って分かりやすく説明できたか。	・分かりやすい表現ができたか（口頭・ポスター）。 ・楽しい表現ができたか（ポスター）。

プランニング対決評価項目

①プランニングの内容の深さや広さ（調査力）
②プランニングの論理性及び説得力（論理的構成力）
③プレゼンテーションの適確さ（表現力）
④チームワーク（協働性）
⑤質問・批判とそれに対する回答の適確さ（対応力）
⑥総合評価

(3)考察及び成果と課題

①　観点を明確にした授業ごとの教員評価により，生徒に到達目標を明確にすることができた。

②　観点を明確にして自己評価・相互評価させることにより，自己の不足点や改善点を自覚させることができた。

4　宿泊を伴う「総合的な学習」を探究型にする取り組み

(1)研究の重点

宿泊行事を伴う「台湾現地学習」について,より探究型になるように学習内容,方法を改善する。

(2) 具体的な取組

1年目の取り組みと反省

H21年度「台湾現地学習」年間実施表

1年2学期　台湾事前学習１ 個別学習テーマ決定に向けて ・外務省職員,台湾ジャーナリスト,本校教員による講義 個別学習テーマ決定 共通テーマによる班編成
１年３学期　台湾事前学習２ 個別研究 班ごとの意見交換 研究発表 冊子「台湾事前研究」作成
１年春季休業　台湾現地学習 台湾の大学生と班別自主研修
２年１学期　台湾事後学習 レポートを提出させ，冊子「台湾現地学習事後レポート」作成

① 個別テーマ決定を意識して事前講義を行ったので，テーマ決定に有効になった。テーマは，政治や経済から食文化やサブカルチュアに至るまで，生徒はそれぞれ興味関心に応じて多岐にわたるテーマを設定した。

② 生徒間の友人関係とは別に，個別テーマの共通する生徒でグループを編成したので，十分に協同性を発揮させることができなかった。

③ 現地学習における班別自主研修(4日目）では，班ごとに台湾の大学生を同行させ，研修を充実させることができた。

④ 事前研究と現地学習，事後レポートが十分に関連付いたものにできなかった。

⑤ 「生活と社会」と「台湾現地学習」との関連が途切れたものになった。

台湾事前研究班別発表

事前研究レポート集

事後レポート集

2年目の改善点

① 友人関係を重視して現地学習グループを作らせ，グループテーマを決めさせた後，その中で個別テーマを決定させた。グループ内発表，グループ内での現地調査事項の検討など,協同性を発揮させる工夫を行った。

② ＫＪ法によるグループディスカッションやグループ発表会など「生活と社会」の手法を「台湾現地学習」にも導入した。

③ 個別研究を充実・深化させるために,仮説の設定,日本国内での調査,現地での調査，日本との比較など,研究方法を明示した。

④ 自己の生き方・在り方の探究につながるよう，台湾をフィールドとした事例研究及び現地での体験を内在化させるレポートの作成方法を工夫する。（23年度４～5月実施）

H22年度「台湾現地学習」年間実施・計画表

１年２学期　台湾事前学習１ 個別学習テーマ決定に向けて ・外務省職員，台湾ジャーナリスト， 本校教員による講義 現地学習グループ決定
１年３学期　台湾事前学習２ ＫＪ法によりグループテーマ決定 個別研究テーマ決定 個別研究レポート作成 グループ内発表 班別自主研修計画作成
１年春季休業　台湾現地学習 台湾の大学生と班別自主研修
２年１学期　台湾事後学習 台湾研究発表会 冊子「台湾研究」作成

ＫＪ法によるグループテーマ決定及び発表

グループ内での個別研究発表

平成22年度台湾現地学習日程

3月22日	奈良方面研修
3月23日	台湾へ出国
3月24日	ウーライ視察・九份視察
3月25日	**班別自主研修**
3月26日	帰国

(3)考察及び成果と課題

①　友人関係を重視した現地学習のグループを作らせることにより，グループテーマの決定，事前研究発表を充実させることができ，協同性を発揮させることができた。

②　学習方法において「生活と社会」との一貫性を重視することにより，生徒は円滑に協同学習・個人学習に入れた。

③　個別研究の方法を明示することにより，個別研究レポートやグループ内発表，班別自主研修計画を充実させることができた。

④　台湾研究レポートが，事前学習，現地学習，事後学習の一貫性のあるものになるようフォーマットを明確にし、学習内容が生徒に内在化するよう指導する。（現在進行中）

5　教育課程全体の中での「総合的な学習の時間」の位置付けの検討

(1)研究の重点

各教科および生徒会活動・HR活動・進路学習・特別学習などの教科外学習活動と「総合的な学習の時間」の関係を検討する。

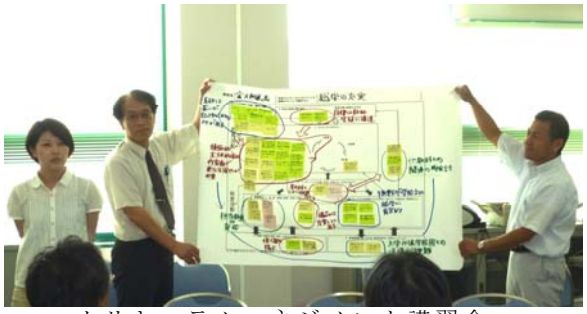
(2)具体的な取組

①　群馬県立尾瀬高校・埼玉県立不動岡高校・福岡県立城南高校・熊本県立鹿本高校・名古屋大学附属高校の「総合的な学習の時間」担当教員を本校に招き，「高等学校『総合的な学習の時間』先進校シンポジウム」を開催し，各校の実践と課題を共有した。（22年7月31日）

「総合的な学習の時間」シンポジウム

② 福岡県立城南高校・熊本県立鹿本高校の視察を行った。（22年10月3日・4日）

③ 村川雅弘鳴門教育大学教授，田村知子中村学園大学講師を招き，本校の「総合的な学習の時間」について，ワークショップ型カリキュラムマネジメント研修会を開催した。



カリキュラムマネジメント講習会

④ 各教科と「総合的な学習の時間」の関係を考察した。

⑤ 生徒会活動・HR活動・進路学習・特別学習などの教科外学習活動と「総合的な学習の時間」の関係を考察した。

(3)考察及び成果と課題

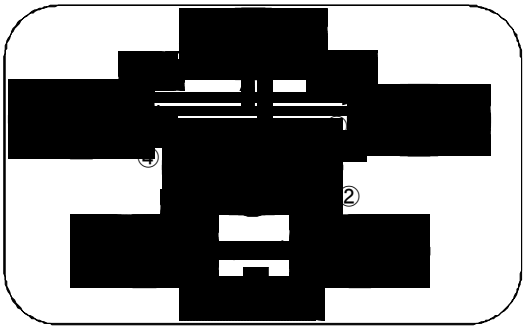
① 各学校が，実情に合わせてそれぞれ創意工夫することの重要性を認識できた。その中で，知的探究心を刺激し，知の技法（情報収集分析能力や論理的構成力），協同性，表現力を習得させ，知の柔軟性を育む学習であるという点が，本校の「総合的な学習の時間」の特徴であるということが明確になった。

先進校の事例

特　徴	高　校
キャリア教育	埼玉県立不動岡高校 福岡県立城南高校
地域素材	群馬県立尾瀬高校
テーマ学習から生き方探究	熊本県立鹿本高校 名古屋大学附属高校
宿泊行事の探究化	広島県立安芸南高校 本校「台湾現地学習」
知の柔軟性	本校

② 教科学習および教科外学習で習得した知識・理解・技能が，「総合的な学習の時間」で活用され，探究に効果を発揮されるのみならず，「総合的な学習の時間」で習得した知識・理解・技能が，教科学習及び教科外学習で，活用され，探究に効果を発揮されていることが判明した。

本校の教育活動と「総合」



③ 教員集団としての「総合的な学習の時間」に関する認識を共有できた。

3　研究の成果と課題

① 「生活と社会」において，身近な諸問題や未来を創造するテーマについて，KJ法によるブレーンストーミング，ディベート，プランニング対決と段階的

に方法をステップアップしながら学習させた。プレゼンテーション技能については教科「情報」と連携を取りながら進めた。また，授業ごとに，口頭または文章による観点別の評価を行い，到達目標を明確にした。その結果，生徒に，他者よりもより良い内容を，よりうまく表現しようとする健全な競争力を生みだすことができ，学習意欲を高め，論理性・創造性・問題解決能力・協同性・表現力などの諸能力をスパイラル的に育成することができた。さらに，知の技法を身に付けさせるとともに，知的探究心を高め，知の柔軟性を育むことができた。特に，「今後もこのような学習を頑張りたいか」という意欲を喚起できたことは大きな成果であると考える。

プランニング対決自己評価（H23年度）　%

	1	2	3	4
論理性	38.1	45.8	13.6	2.5
プレゼン力	43.2	44.9	9.3	2.5
協同性	62.7	30.5	6.8	0
視野の拡大	40.7	51.7	6.8	0.8
参加度	66.1	29.7	3.4	0.8
今後も頑張りたいか	74.6	22.9	1.7	0.8

１十分＋　２やや＋　３やや－　４マイナス

② 「台湾現地学習」に関して，「生活と社会」との関連性を意識させること，グループの作り方を人間関係中心にしたこと，研究方法を明確にしたことにより，事前学習をより協同的，探究的なものにすることができた。

③ 「台湾現地学習」事後学習を，自己の生き方・在り方の探究につながるものにすることが課題である。

④ 他の先進校と成果や課題を共有する中で，学校や生徒の状況によって，多様な「総合的な学習の時間」があり，それぞれにおいての創意工夫が重要であると認識した。「総合的な学習の時間」をキャリア学習の形で展開する学校は少なくないが，本校の実践の場合，直接にはキャリア学習につながっていない。しかし，知的な営為が，キャリア学習の前提となる「自らを知る」「社会を知る」学習となっている。

⑤ 教員研修や生徒の学習活動を通して，教員の中で「総合的な学習の時間」の重要性の認識は深まっている。また，各教科・科目（現代社会・世界史A・家庭科・英語科）においても，「総合的な学習の時間」で培われた探究的な学習方法を導入する試みも行われている。

英語の授業におけるプレゼン

ブレストを用いた世界史授業

⑥ 本校の「総合的な学習の時間」実践の蓄積を次世代の若手教員に継承し，若手教員が新たな視点からさらに改善を加えることが課題である。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	ひろしまけんりつあきみなみこうとうがっこう 広島県立安芸南高等学校

校 長 名：守下　智昭

所 在 地：広島県広島市安芸区矢野西二丁目１５－１

電話番号：082-885-2341

新学習指導要領の趣旨を具体化するための 指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	総合的な学習の時間

《研究主題》

表現力の育成を目指す「総合的な学習の時間」の工夫改善

―言語活動充実のための取組を通して―

【研究の要点】

1　具体的な方策

言語活動を充実させ，校内全体で取り組むため，①単元毎に生徒相互の評価を設定する，②プレゼンテーションの機会を多く設ける，③総合的な学習の時間と各教科との関連を図るという三点を掲げた。

1学年は，自らを振り返ることに重点を置くとともに将来の展望を持たせるため，自分史研究・総学新聞・希望別のゼミ形態によるグループ課題研究を行った。2学年は，北海道研修旅行(就業体験を含む)における課題別グループ研究を中心に，希望別のゼミ形態による個人課題研究・レポート作成・社会問題に関する論文作成等を行った。3学年は，自らの将来へ向けての探究活動として，自己の適性を考える点に重きを置いて，個人学習，グループ学習を随時繰り返しながら行った。

2　取組による研究成果

○探究が深まるように，生徒相互の評価を取り入れた主体的な言語活動の在り方を工夫したことで，他者と自分自身を比較し，改善点を見出せるようになった。

○プレゼンテーションを繰り返し，成就感を味わうごとに生徒の学習意欲は確実に高まっていった。また，生徒達の変容に接する中で，指導する教員の意識も徐々に高まってきた。

○「習得→活用→探究」の学習サイクルを意識したプログラム編成で言語活動の機会を仕組み，表現力の向上を図ったことで，すべての教科において，生徒たちの表現活動が変わり始めている。

○「総合的な学習の時間」の活動内容を各教科の指導と関連付けて体系化していくことで，各々の教科で学んだ断片的な知識を生徒自身で関連付けることができるようになった。

○情報教室や図書室を活用した調査学習を取り入れることで，知識や視野の拡大を図る方法を身に付けることができた。

3　今後の課題

○言語活動充実のための継続課題として，表現力向上に向けた効果的な指導法

○総合的習の時間と教科学習との関連付けの在り方

○総合的な学習の時間における評価

○小中高の到達目標やスキル習得の確認・連携

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，昭和 61 年度に設置され，現在 19 クラス，生徒数 751 名，教職員数 51 名の全日制普通科である。入学生の約８割を地元中学校出身〔広島市安芸区，安芸郡の中学校〕で占めており，卒業時には，約９割が進学する。

本校の教育は，校訓「創造・自律・健康」にあるように，「知・徳・体の調和のとれた全人教育を実践し」「社会において有為な人材を育成する」ことにある。特に，教師と生徒，及び生徒相互の人間的なふれあいを大切にし，厳しく徹底した教育活動を勉学と部活動の両面で行うことを「文武琢磨」という言葉に込めて実践してきた。部活動加入率は９割を超え，体育系・文化系ともに活発な活動を行っており，毎年中国大会や全国大会への出場を果たしている。

積極的な生徒指導を徹底し，入学直後の体育では「集団行動」の指導を充実させているのが特色で，地域や保護者からは高い評価を得ている。また，あわせて組織的できめ細やかな教育相談を行っている。しかし，どちらかといえば受け身で，主体的に考えることに慣れておらず，論理的に考える作業が苦手な生徒が多い。したがって，生徒が「主体的に考える」機会を数多く設定し，受け身になりがちな授業を工夫するよう，全教職員で取り組むように努めている。

2　学校の概要（平成 22 年５月１日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	7	281	6	234	6	236	19	751
計		7	281	6	234	6	236	19	751

教員数　43 名

※教育研究部を中心として，各学年・各教科〔国語９：地理歴史４：公民２：数学６：理科６：保健体育６：英語６：家庭２：情報１：芸（音・美・書）３〕で取り組むため，管理職及び事務職員等を除く全教員が該当する。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

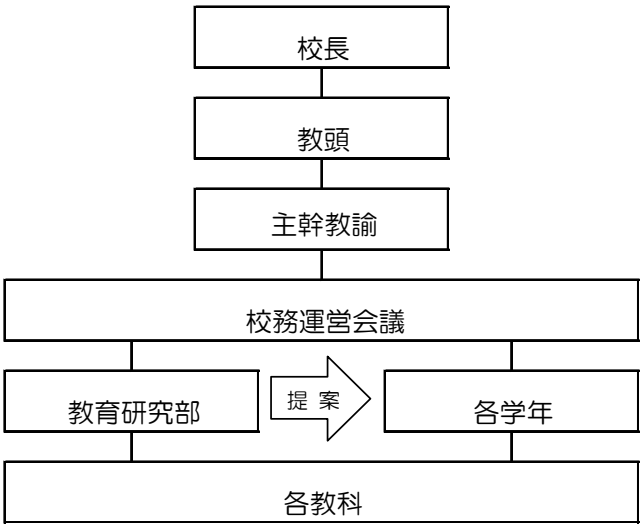
１　研究主題等

(1) 研究主題

表現力の育成を目指す「総合的な学習の時間」の工夫改善
―言語活動充実のための取組を通して―

(2) 研究主題設定の理由

言語活動の充実は今回の学習指導要領の改訂において，各教科等を貫く重要な改善の視点である。すべての教科等の指導計画に言語活動を位置付けるとともに，探究的な活動を進める総合的な学習の時間においても，様々な言語活動に取り組み，その相互の関連により，生徒の表現力の育成を目指す必要性を痛感したため，本主題を設定した。



(3) 取組体制

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	１学年　職場体験学習・社会問題に関心を持つための自己表現活動・プレゼンテーション ２学年　上級学校理解・上級学校研究ディベート・小論文指導 ３学年　人生設計・進路研究・社会問題を考える自己表現活動・「私のキャリアノート」
平成22年度	１学年　自分史研究・総学新聞グループ課題研究(希望別のゼミ形態)プレゼンテーション・自己表現活動 ２学年　北海道研修・ポスターセッション個人課題研究(進路別のゼミ形態)プレゼンテーション・小論文指導 ３学年　人生設計・進路研究・社会問題を考える自己表現活動・「私のキャリアノート」

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1)研究主題を踏まえた研究の重点

①　探究が深まるように，生徒相互の評価を取り入れた主体的な言語活動の在り方を工夫する。

②　「総合的な学習の時間」の活動内容を各教科の指導と関連付けて体系化していく。

(2)具体的な取組

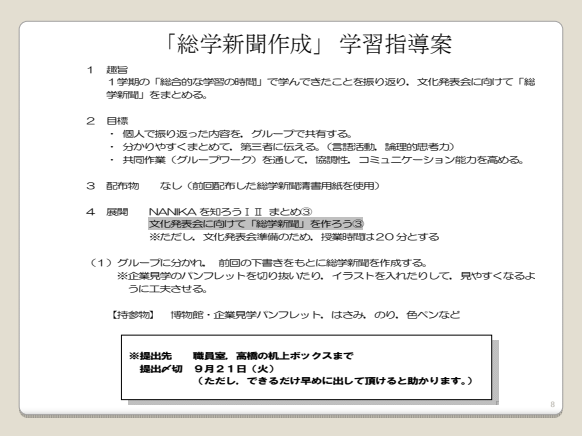
①　昨年度より，各教科共通の授業改善のテーマとして，生徒各自の「書く活動を通して論理的な思考力を高める」授業実践の取組を推進した。総合的な学習の時間においても，書く活動を重視して３年間の内容の見直し，系統化を行った(NANIKA “S” PROJECT)。　〔資料Ⅰ参照〕

②　昨年度実施により明らかになった課題としては，生徒の言語活動の成果を発表する機会を工夫することで，生徒一人一人が自分の表現活動を相対的に評価し，表現力の向上には何が大切かを気付かせる必要がある点。また，根拠を基に論理的に考え深めることについては不十分である点。さらに，

各教科の指導方法と関連付けた総合的な学習の展開を体系化しなくてはならない点等が挙げられる。初年度の研究から明確になったこれらの課題を克服すべく，以下に述べる具体的な取組を，１学年は「自分史研究」，２学年は「北海道研修」を中心として行った。

１年生の取組

・入学時までの学習活動や成長の記録（中学校での職場体験等）の整理を通して，自己理解を深め，社会との関わりを再認識させた。
・博物館・企業見学プログラムを導入して，勤労観を養い，地域社会との関わりを認識させた。
・年度前半の活動を「総学新聞」としてまとめて掲示発表し，他者の作品と比較する相互評価を行うことで，表現力の向上には何が必要かを考えさせた。



「総学新聞作成」 学習指導案

１　趣旨
１学期の「総合的な学習の時間」で学んできたことを振り返り，文化発表会に向けて「総学新聞」をまとめる。

２　目標
・ 個人で振り返った内容を，グループで共有する。
・ 分かりやすくまとめて，第三者に伝える。（言語活動，論理的思考力）
・ 共同作業（グループワーク）を通して，協調性，コミュニケーション能力を高める。

３　配布物　　なし（前回配布した総学新聞清書用紙を使用）

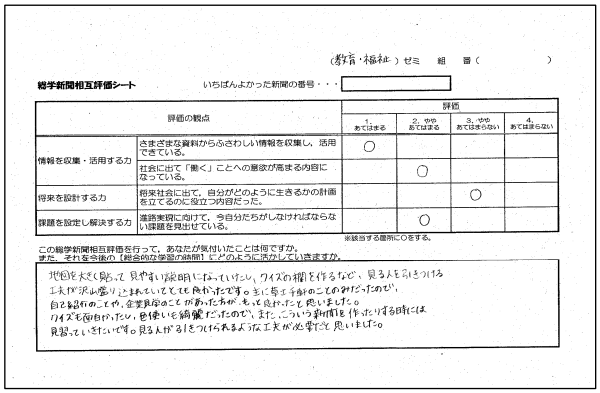
４　展開　　NANIKA を知ろうⅠⅡ まとめ③
文化発表会に向けて「総学新聞」を作ろう③
※ただし，文化発表会準備のため，授業時間は２０分とする

（１）グループに分かれ，前回の下書きをもとに総学新聞を作成する。
※企業見学のパンフレットを切り抜いたり，イラストを入れたりして，見やすくなるように工夫させる。

【持参物】　博物館・企業見学パンフレット，はさみ，のり，色ペンなど

※提出先　　職員室，高橋の机上ボックスまで
提出〆切　　９月２１日（火）
（ただし，できるだけ早めに出して頂けると助かります。）

総学新聞と相互評価シート



（教育・福祉）ゼミ　組　番（　　）

総学新聞相互評価シート　　いちばんよかった新聞の番号・・・

評価の観点		評価 1. あてはまる	2. ややあてはまる	3. ややあてはまらない	4. あてはまらない
情報を収集・活用する力	さまざまな資料からふさわしい情報を収集し，活用できている。	○			
	社会に出て「働く」ことへの意欲が高まる内容になっている。		○		
将来を設計する力	将来社会に出て，自分がどのように生きるかの計画を立てるのに役立つ内容だった。			○	
課題を設定し解決する力	進路実現に向けて，今自分たちがしなければならない課題を見出せている。		○		

※該当する箇所に○をする。

この総学新聞相互評価を行って，あなたが気付いたことは何ですか。
また，それを今後の「総合的な学習の時間」などのように活かしていきますか。

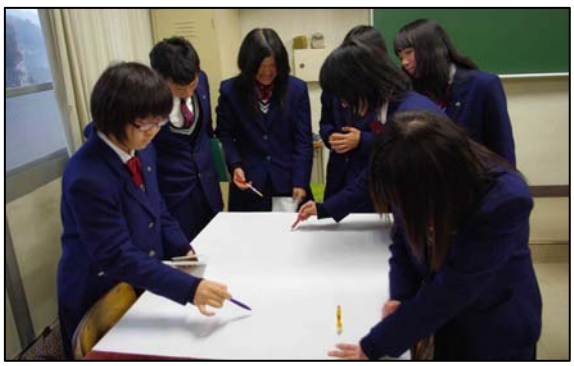
地図を大きく貼って見やすい説明になっていたし，クイズの欄を作るなど，見る人を引きつける工夫が沢山盛り込まれていてとても良かったです。主に毎日手伝のことのみだったので，自己紹介のことや，企業見学のことがあったらもっと良かったと思います。クイズも面白かったし，色使いも綺麗だったので，また，こういう新聞を作成する時には見習っていきたいです。見る人が引きつけられるような工夫が必要だと思います。

・なお，この「自分史研究」では，現代社会や家家庭基礎，保健，情報等で学ぶ内容をベースにして，社会の仕組みや勤労の意義について考えさせた。

教科リンクの姿

・年度後半では，生徒の希望別に，11 のゼミを開講し，グループ発表活動を通して，より高度な学習を目指す態度を養った。調査内容の発表と相互評価活動により，表現力が身に付いているかの評価を行った。

ゼミ別 グループ課題研究の様子

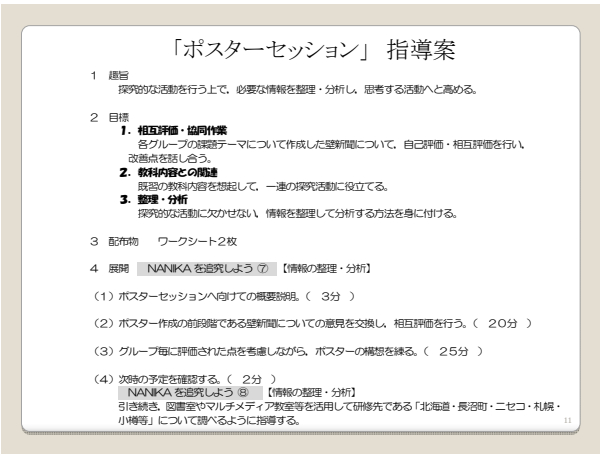


２年生の取組

・２年生の北海道研修旅行と関連付けて，テーマに基づいた課題を設定し，グループ調査や研究活動を実施させた。生徒間の相互評価を積極的に行い，それぞれのテーマの枠を越えて話合いを重ねた上でまとめさせた。また，各教科で北海道に係る学習を行う期間（北海道ウィーク）を設けて，興味・関心を高め，グループ調査との関連付けを図った。

ファームステイ（就業体験学習）

・９月の文化発表会において，グループ毎にポスターセッションの形態で，来場者へ向けての説明発表を行った。その後，各クラスで文化発表会における相互評価を基に選抜し，改善を施した後，10 月の教育課程研究指定校事業実践発表兼総合的な学習の時間コーディネーター養成講座の研修会を兼ねた公開研究授業において，探究活動の成果を発表させた。



「ポスターセッション」 指導案

1　趣旨
探究的な活動を行う上で，必要な情報を整理・分析し，思考する活動へと高める。

2　目標
1．相互評価・協同作業
各グループの課題テーマについて作成した壁新聞について，自己評価・相互評価を行い，改善点を話し合う。
2．教科内容との関連
既習の教科内容を想起して，一連の探究活動に役立てる。
3．整理・分析
探究的な活動に欠かせない，情報を整理して分析する方法を身に付ける。

3　配布物　　ワークシート2枚

4　展開　NANIKA を追究しよう ⑦ 【情報の整理・分析】

（1）ポスターセッションへ向けての概要説明。（　3分　）

（2）ポスター作成の前段階である壁新聞についての意見を交換し，相互評価を行う。（　20分　）

（3）グループ毎に評価された点を考慮しながら，ポスターの構想を練る。（　25分　）

（4）次時の予定を確認する。（　2分　）
NANIKA を追究しよう ⑧ 【情報の整理・分析】
引き続き，図書室やマルチメディア教室等を活用して研修先である「北海道・長沼町・ニセコ・札幌・小樽等」について調べるように指導する。

ポスターセッションの様子

・　前述の活動後，12 のゼミを開講し，個人研究を行った。自らの進路に関わる課題を設定し，“SMALL－STEP”での探究活動を継続していくことで，将来への礎を築かせる意図を持って取り組ませた。

探究テーマ抜粋

看護・医療系
- ・看護師の役割について
- ・医療現場の実態
- ・高齢社会における看護師の対応
- ・臓器移植について
- ・歩けるまでの理学療法士の仕事
- ・コミュニケーションのとり方
- ・クローン技術について

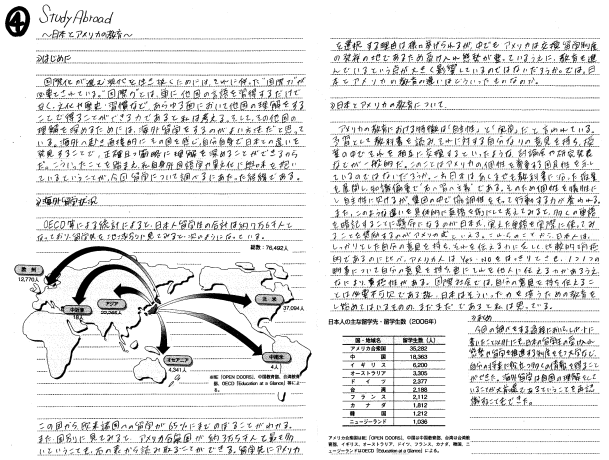
教育・国際・語学・文学系
- ・日本の英語教育
- ・外国と日本の子育て～教育の違い
- ・韓国の食事のマナーとグルメ
- ・Study Abroad
- ・アフガニスタンの現状と日本の支援
- ・太宰治の生涯

・また，ゼミ別探究活動では，「課題の設定」や「情報の収集」「整理・分析」の際，その時点までに学んだ各教科の内容知を活用させる指導を行った。そのことにより，各教科で学んだ断片的な知識を関連付け，学習方法を身に付けさせながら「知の総合化」を

図った。

・さらに，考えをまとめて発表する言語活動を繰り返させることで，根拠を基に考察を深め，かつ表現力の向上に必要なものに気付かせる指導に努めた。

ゼミ別 個人課題研究 発表原稿



・「総合的な学習の時間」で学んだ「習得→活用→探究」の学習サイクルが，各教科の授業にも取り入れられるようになった。

古典の授業との教科リンク

(3)　考察及び成果と課題

①　相互評価を行うことは，表現力の向上には何が必要かを考える機会を得ることにつながった。しかし，一部の生徒は，発表等の技能面に関心がとどまってしまい，内容面を深めることが不十分であった。

→評価規準を適切なものに改め，学習が段階的に深まっていくようにすることが必要である。

②　生徒たちが調べた事柄に関して，相互に発表や評価を繰り返し，改善点を指摘し合う活動を通じて，より正確な資料検索や効果的な発表方法を主体的に工夫できるようになった。その結果，自己表現活動への意欲が生まれた。

→更なる自主性を育む取組が必要である。

③　２年生のプレゼンテーション(ポスターセッション形態)において，自己評価と相互評価を繰り返しながら，表現活動の充実を図ることができた。しかし，研修先についてほとんど知識がない段階でテーマ設定を行ったことで，課題内容が特定のものに集中し，内容的にも浅くなる傾向があった。

→事前学習を行う時間確保に努め，ビデオ視聴等により，生徒の興味・関心を高める取組が必要である。

④　日程の関係でグループ研究の作業期間が短期間であったため，情報収集の手段としてインターネットに頼る点が多々あった。

→実際には，情報収集の手段は多種多様であるので，生徒に幅広い情報媒体の紹介を行っていくことが大切である。

⑤　研修旅行の約２か月前から，「北海道ウィーク」と称して，各教科でそれぞれの関連事項を授業内容に取り入れたが，「知の総合化」としては不十分であった。

→テーマと各教科の指導内容との関連付けをより体系的に行う必要がある。

(4)　意識調査アンケートの結果から〔資料Ⅱ参照〕

①　生徒対象アンケート

平成21年10月と，平成22年10月，12月には生徒を対象に意識調査アンケートを行った。

現２年生の意識と実感の変化をみると，１年時には，総合的な学習の時間の内容自体には概ね肯定的で，大切であるという意識が高く，およそ93%だったが，それが身に付いた実感があるかという問いに対する肯定意見は，約50%にとどまっていた。しかし，22年度の取組を通し

て，身に付いたという実感は79%にまで伸びた。およそ30ポイント高まったことに，一定の成果が認められる。生徒たちは，北海道研修を契機として探究的な活動を行い，質の高い発表を目指す中で，スキルの活用だけでなく探究内容の深まりを実感している。

現１年生が「総合的な学習」で学んだことが身に付いたという実感は73%を超えている。現２年生の１年時との比較で，昨年度の同時期は約50%だったことから考えると，今年度の展開が有効であったと言える。総じて２年間の研究を通して，「総合的な学習の時間」で学ぶ方法知の獲得への意識が向上し，幾度も繰り返した発表活動を通じて内容的・技能的な面での表現力が身に付いたという実感が高まっていると結論できる。

② 教職員対象アンケート

教職員へ向けた意識調査アンケートでは，教職員の95%に意識の変化を見ることができた。その特徴は，「総合的な学習の時間」の工夫により表現力の育成を目指した結果，「進路」，「教科学習」，「総合的な学習の時間」を分けて捉えるのではなく，一体のものとして取り組むことができたという点にある。また，指導体制として，学年会を中心に指導者同士で連携して実施することで，各教科で学んだ内容知を総合的な学習に活かして思考を深め，探究活動を行う際の手がかりにすることの意義が生徒に浸透したと考えられる。

教職員のアンケート記述 参考例

・総合的な学習の時間が，卒業後の進路や生徒一人一人の生き方に直接影響する大きな取組であると改めて認識できました。生徒の将来の成長を見据えて段階的に計画をして取り組まれているので，とても生徒たちの力が付いていることを実感しています。

・今までは「進路」，「総合的な学習の時間」，「教科」と分けて教えていたのですが，横断的に捉えていくという意識に変わりました。

・教科との関連を図ってゼミ指導する教員が増えました。総合が教科の授業を変えている面があると思います（発表学習・班学習）。総合の中身について，教員間での会話が増え，講義形式の一方的な進め方から生徒主体を意識した取組になりました。

3 研究の成果と課題

１ 「探究が深まるように，生徒相互の評価を取り入れた主体的な言語活動の在り方を工夫する」ことについては，諸言語活動を有効に関連付け，課題研究を充実させることができた。更なる表現力の向上を目指し，探究活動を深化させていくことが重要である。

２ 「『総合的な学習の時間』の展開を各教科の指導と関連付けて体系化していく」ことについては，総合的な学習の時間と各教科の接点を見出すことはできたが，体系化の困難さに直面している。各教科の到達目標とシラバスの指導計画，評価の在り方等を考慮し，総合的な学習の探究活動とのリンク，効率的な表現力向上のシステムづくりを目指さねばならない。

３ 評価に関しては，各学年とも生徒相互の評価を繰り返すことで，思考や作品をより高い水準へ導くことができたと考えている。その点では有効であったが，単元毎や年度毎のみならず，１年生から３年生までの成長過程における評価に系統性を持たせるとともに，相互評価を活かして評価の観点を作成すべきである。また，生徒作品を保存し，評価を行う指導者側の評価力を高めなければならない。

４ 研究協議会において助言いただいた小中高の連続した積み重ねが大切であるという点で，校種間を越えた系統性を把握して計画を組むことが必要である。例えば，入学時や年度当初には，生徒への総合的な学習の時間に関するアンケートやインタビューを十分に行った上で，高校３年間でどのような力を養っていくのかを明確にし，生徒の認識や理解を深めることで目的意識を持たせる指導が重要であろう。